

中東問題を観る眼

朝日カルチャーセンター・新宿教室

若林 啓史

講座の全体像

第1回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その1：ゾロアスター教

第2回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その2：ユダヤ教

第3回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その3：東方キリスト教

第4回 イスラームは偏狭な宗教？ 寛容な宗教？ 中東の多数宗教・イスラーム

第5回 中東は部族社会？ 中東の社会構造 その1

第6回 中東は宗派で分断されている？ 中東の社会構造 その2

第7回 中東は男尊女卑？ 中東とジェンダー

第8回 中東の国々はどこも産油国？ 石油問題と中東観のかたより

第9回 中東に民主主義は根付くのか？ 中東民衆の政治参加

第10回 イスラエルと湾岸アラブ諸国は手を結ぶのか？ 中東の新たな対立構造

第11回 日本外交における中東の重みは？ 中東外交の黄昏

第12回 なぜ日本の中東論文は英語で書かれるのか？ 戦後日本の中東研究

【中東地図】



第2回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教：

その2 ユダヤ教

2023年2月23日



写真 エジプトから脱出するユダヤの民

「ドゥラ・エウロポス」にあったシナゴグ遺跡の壁画。「ドゥラ・エウロポス」は、ヘレニズム時代に建設された都市で、ローマ時代には、帝国東端の軍事拠点であった。ユーフラテス河の西岸、現在はシリア領にある。シナゴグ遺跡としては最古の部類に属し、西暦3世紀の紀年銘が発見されている。写真は、旧約聖書「出エジプト記」の場面である。2つのポーズをとるモーセが、同一の図に描かれている。遺跡は「イスラーム国」により破壊されたが、壁画はダマスカスの国立博物館で保存されている

1 中東のユダヤ教

- ユダヤ教は、一神教であるキリスト教とイスラームの成立に大きな影響を与えました
- しかし、キリスト教とイスラームは、ユダヤ教の教えを無条件に受容したのではなく、それぞれの立場から、ユダヤ教を先行宗教として認めつつ、批判的な態度も採っています
- 特に宗教団体としてのユダヤ教徒共同体に対しては、キリスト教徒は、ユダヤ教徒の讒言により、イエスが磔刑にされた過去を忘れません。イスラーム教徒は、自らの集団が成長する初期の歴史において、ユダヤ教徒と対立する場面がありました
- 古代のパレスティナ地方に存在したユダヤ教徒共同体が、世界に離散した物語は、彼らが依然一つの「民族」なのか、伝説に過ぎないのかという、謎と論争に満ちています
- イスラーム諸王朝におけるユダヤ教徒の境遇は、いかなるものだったのでしょうか？
- 19世紀にシオニズムが生まれ、20世紀にイスラエル建国として現実化して以来、ユダヤ教は政治面でも、中東の現代史に深く関わっています



写真 エルサレム旧市街の「嘆きの壁」

1967年以来、イスラエルが占領している東エルサレムには、城壁で囲まれた古代から続く市街地がある。その一角に、「岩のドーム」や「アクサー・モスク」など、イスラームの聖地が集中する丘があり、ユダヤ教徒は、同じ場所を「神殿の丘」と呼んでいる。西暦70年、ユダヤ教徒の神殿はローマ帝国により破壊された。「嘆きの壁」は、破壊された神殿の一部と伝えられ、ユダヤ教徒が祈りを捧げる場である

2 「ユダヤ人」か、「ユダヤ教徒」か？

- 古代ユダヤ教の時代、ユダヤの民は旧約聖書の伝承やヨセフスの『ユダヤ戦記』にあるような、血縁や地域性を伴った民族集団を形成していたと推測されます
- しかし彼らは、紀元70年のローマ帝国によるエルサレム神殿破壊が契機となって離散し、広く各地に「ディアスポラ」と呼ばれる共同体を形成することになりました
- この時の「ユダヤ人」と、現在世界各地に居住する「ユダヤ教徒」は、同一なのでしょうか？ 言い換えれば民族集団としての「ユダヤ人」が実体を伴って存続しているのか、様々な出身の改宗者を含む「ユダヤ教徒」の総称に過ぎないのか、議論があります
- 「ユダヤ人」が故郷パレスティナに戻り、再度国家を建設しようとした政治運動「シオニズム」の立場では、「ユダヤ教徒」は血統に基づく「ユダヤ人」と同一視されます
- しかし、東欧から北アフリカ、エチオピアのユダヤ教徒まで血縁関係にあるとの主張には、生物学的に無理があり、カスピ海沿岸に居住したハザール人や、北アフリカのベルベル人による、ユダヤ教への集団改宗説を認めざるを得ないとの意見もあります



写真 イスラエルのマサダ遺跡

マサダ遺跡は、死海の西のほとりにある。「マサダ」とは、ヘブライ語で「要塞」を指し、紀元前37-31年には、ヘロデ王がこの地に宮殿を築いた。ヨセフスの『ユダヤ戦記』によれば、ローマ帝国に対する叛乱を起こしたユダヤ教徒の一部は、西暦73-74年、マサダに立籠もって抵抗した後、全滅したと伝えられる。しかし、1960年代の発掘調査では、ヨセフスが記した犠牲者数を裏付ける人骨は、発見されなかった。ユダヤの民は、エルサレム神殿破壊やマサダの陥落が契機となって離散し、各地にディアスポラと呼ばれる共同体を形成した

3 ユダヤ教とシオニズム

- 多くの人は「シオニズムは、ユダヤ教の政治運動である」と考えているかも知れません
- しかし、ユダヤ教とシオニズムは、深い関係があっても別物であり、シオニズムを拒絶するユダヤ教徒もあります
- 「シオニズム」の語源である「シオンの丘」は、ユダヤ教ではエルサレムと同義です
- 「シオン」は、神が全人類を救う言葉を与える場所であり、救済の象徴でした。「シオン」への帰還は、バビロンの捕囚（紀元前586年）となったユダヤ教徒以来の願いでした
- しかし、敬虔なユダヤ教徒は、「シオン」が永遠の救済と不可分の象徴であると理解しており、救世主の出現がないまま「シオン」に帰還することを拒否しました
- 預言者エズラは紀元前538年頃、エルサレムの神殿を再建するよう呼び掛けました。イエメンのユダヤ教徒は、救世主の出現まで、神殿を再建すべきでないと考えました
- 「シオニズム」は、19世紀の欧州で、様々な民族がナショナリズムに覚醒した動向に触発された政治運動であり、ユダヤ教と世俗的ナショナリズムの混合でした。しかし、帝政ロシアやナチス・ドイツの迫害から逃れる手段として、ユダヤ教徒に支持が広がりました



写真 カージャール朝ペルシア帝国のユダヤ教徒 1880年頃撮影

写真中央、座して書物を手にする老人は、カーシャーン出身のユダヤ教徒で、当時ペルシア帝国随一の名医と謳われたネフラーイー（1809-1899）である。周囲の人物は、ネフラーイーの家族や患者である。ネフラーイーは伝統医学を修め、「医師たちの光」と讃えられた。ある日、彼はシーア派聖地コムに立ち寄り、有力なイスラーム法学者の娘の葬列に出逢った。ネフラーイーは、娘が仮死状態にあったのを見て、蘇生させた。イスラーム法学者は、ネフラーイーに「栄誉の光」の称号を贈った。ネフラーイーの次男、アフラートゥーン・ネフラーイーと三男、ミールザー・アーガー・ハーンや孫たちも名医として知られた

4 イスラーム世界におけるユダヤ教徒

- ディアスポラのユダヤ教徒のうち、中東地域に留まった人々を「ミズラヒーム」と呼びます。1492年の追放令でスペインから逃れた人々は「スファラディーム」といい、一部はオスマン帝国に移住しました。両者は東方系ユダヤ教徒です
- イスラーム世界のユダヤ教徒は、キリスト教徒と並んで「啓典の民」の処遇を受け、信仰の保持が承認されました
- 特に、前近代のイスラーム世界では、スペイン・コルドバ出身のモシェ・ベン・マイモン（マイモニデス 1138頃-1204）のように、哲学者や天文学者などとして顕著な功績を挙げたユダヤ教徒も少なからずみられました



写真 ワルシャワのゲットー 1940年撮影・カラー原版

フーゴー・イエゲル（1900-1970）は、ヒトラーの公式カメラマンの一人で、カラー撮影を担当した。ドイツ敗戦に際し、イエゲルはフィルムをガラス容器に密閉、ミュンヘン郊外に埋めた。彼は1955年、これらの画像を無傷で回収した。その中には、ドイツ占領下ワルシャワのゲットーを記録したカラー写真があった。看板には、ドイツ語とポーランド語で「疫癘規制区域：通過交通限定」の文字がみえる

5 欧州のユダヤ教徒

- ドイツ・東欧系のユダヤ教徒は「アシュケナズィーム」といい、現在、世界中のユダヤ教徒の約半数を占めています
- ユダヤ教に集団改宗した遊牧民族ハザール人を、アシュケナズィームに結びつける説があり、この説への反論もあります。さらに、現代のユダヤ教徒の遺伝子を解析し、アシュケナズィームの発祥の地は中東ではなく、イタリア半島と推定する研究もあります
- 仮にアシュケナズィームの祖先が、旧約聖書のユダヤの民とは別であるとする、イスラエル建国を果たしたシオニズムの主張は、揺らいでしまいます
- 欧州のユダヤ教徒は、キリスト教徒の支配者や民衆からの偏見により、たびたび追放や国籍剥奪などの迫害にさらされ、平時でもゲットーへの居住やユダヤ教徒の標識を衣類につけるよう強制されることがありました。ロシアで19世紀末から発生した「ポグロム」、あるいはナチスによる迫害は、大規模なユダヤ教徒迫害の例として記憶されます
- イスラーム世界では、「啓典の民」への加害は、ごく例外的な状況下でしか発生しませんでした。また、中東の都市の「ユダヤ教徒街区」をゲットーと説明する人がありますが、法令で居住を強制された欧州のゲットーとは、成立経緯から見て異なる概念です



写真 「魔法の絨毯」作戦

イエメンのユダヤ教徒共同体は、最古の歴史を誇っていた。紀元前586年、新バビロニア王国のネブカドネザル2世はエルサレムを奪い、ユダヤ教神殿（第一神殿）を破壊した。紀元前538年頃、預言者エズラは、離散したユダヤ教徒がエルサレムに戻り、神殿を再建するよう呼び掛けた。イエメンのユダヤ教徒は、救世主の出現まで、神殿を再建すべきでないと考え、エズラの説得を拒否したという。ところがイスラエル建国により、彼らの信条は変化した。5万人近かったイエメンのユダヤ教徒は、イギリスの直轄植民地であったアデンに集結した。1949年6月～翌年9月、彼らは「魔法の絨毯」作戦によりイスラエルに空輸された

6 イスラエルとユダヤ教徒

- 19世紀の欧州で、ユダヤ教徒にナショナリズムが芽生え、これに「シオン帰還」運動が合流した「シオニズム」の原型が生まれました
- ロシアでの「ポグロム」の結果、多数のユダヤ教徒がオスマン帝国のパレスティナに逃避しました。「シオニズム」の命名者でもある、ハンガリー生まれのヘルツルは、1897年、スイスのバーゼルで「第1回シオニスト会議」を開催しました
- シオニズムに対して、当初ユダヤ教正統派の多くは、人によって終末を早めると批判的でした。西欧で高い社会的地位を得ていたユダヤ教徒も、居住国への同化努力が水泡に帰すと懸念しました
- 後にイスラエル初代大統領に選出されたワイツマンは、イギリス政官界にシオニズム理解者を増やし、運動を国際政治の舞台に引き上げました
- 第一次世界大戦後、イギリスはパレスティナを委任統治領としました。シオニズム組織は、1940年代に対英協力から武力闘争に転じ、1948年、イスラエル建国を宣言しました



写真 ユダヤ記念館を訪問するモロッコ国王 2020年1月15日撮影

モロッコ国王ムハンマド6世は、大西洋に面したサウィーラ（旧名モガドール）を訪れ、その地のユダヤ記念館を視察した。モロッコには、1950年代、25～35万人のユダヤ教徒が居住したと推定されるが、1960年代にモサドが10万人近いユダヤ教徒を秘密裡にイスラエルに移住させるなど大規模な人口変動が生じ、今では5千人程度に減少している。トランプ政権が、対イラン包囲網構築を狙ってアラブ諸国とイスラエルの和解を推進すると、モロッコは2020年12月、アメリカが西サハラ領有権に関するモロッコの主張を支持する条件で、イスラエルとの関係正常化に合意した

7 イスラエルと中東戦争・パレスティナ問題

- イスラエル周囲のアラブ諸国は、建国宣言の数時間後にイスラエルと交戦状態に入りました。イスラエルは、大戦後余剰となった軍用機や戦車の供給を受けて応戦しました
- 1949年春、イスラエルはアラブ各国と順次個別の停戦協定を結び、第一次中東戦争は終わりました。イスラエルは、委任統治時代のパレスティナの78%を獲得しました
- 一方、パレスティナのアラブ住民のうち、約8割にあたる60万人以上が難民となりました
- 戦争後、イスラエルは東欧のみならず中東からのユダヤ教徒移民を吸収、1951年までにユダヤ教徒人口は、130万人に倍増しました
- イスラエルと周辺アラブ諸国は、1956年、1967年、1973年にも戦火を交えました。1967年の第三次中東戦争により、イスラエルは占領地をヨルダン川西岸地域・ガザ地域・シナイ半島・ゴラン高原に拡大しました
- イスラエルとアラブ諸国は、1979年のイスラエル・エジプト平和条約を転機として和平に向けた努力を始め、1990年代にはかなりの進展がありました。その後は停滞しています